太宰治・作「火の鳥」より抜粋

昔の話である。須々木《すすき》乙彦《おとひこ》は古着屋へはいって、君のところに黒の無地の羽織《はおり》はないか、と言った。

「セルなら、ございます。」昭和五年の十月二十日、東京の街路樹の葉は、風に散りかけていた。

「まだセルでも、おかしくないか。」

「もっともっとお寒くなりましてからでも、黒の無地なら、おかしいことはございませぬ。」

「よし。見せて呉《く》れ。」

「あなたさまがお召《め》しになるので？」角帽をあみだにかぶり、袖口がぼろぼろの学生服を着ていた。

「そうだ。」差し出されたセルの羽織《はおり》をその学生服の上にさっと羽織って、「短

かくないか。」五尺七寸ほどの、痩《や》せてひょろ長い大学生であった。

「セルのお羽織なら、かえって少し短かめのほうが。」

「粋《いき》か。いくらだ。」

羽織を買った。これで全部、身仕度は出来た。数時間のち、須々木乙彦は、内幸町、帝国ホテルのまえに立っていた。鼠いろのこまかい縞目《しまめ》の袷《あわせ》に、黒無地のセルの羽織を着て立っていた。ドアを押して中へはいり、

「部屋を貸して呉れないか。」

「は、お泊りで？」

「そうだ。」

浴室附のシングルベッドの部屋を二晩借りることにきめた。持ちものは、籐《とう》のステッキ一本である。部屋へ通された。はいるとすぐ、窓をあけた。裏庭である。火葬場の煙突のような大きい煙突が立っていた。曇天である。省線のガードが見える。

給仕人に背を向けて窓のそとを眺めたまま、

「コーヒーと、それから、――」言いかけて、しばらくだまっていた。くるっと給仕人のほうへ向き直り、「まあ、いい。外へ出て、たべる。」

「あ、君。」乙彦は、呼びとめて、「二晩、お世話になる。」十円紙幣を一枚とり出して、握らせた。

「は？」四十歳ちかいボーイは、すこし猫背で、気品があった。

乙彦は笑って、「お世話になる。」

「どうも。」給仕人は、その面《めん》のような端正の顔に、ちらとあいそ笑いを浮べて、お辞儀をした。

底本：「太宰治全集第二巻」筑摩書房
1989（平成元）年８月25日初版第１刷発行

初出：「愛と美について」竹村書房
1939（昭和14）年5月20日
入力：西田
校正：山本奈津恵
2000年5月3日公開
2007年2月20日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。